

# 特集にあたって

大津 敦

## 1 胃癌診療の進歩

胃癌はわが国での発生頻度が高く、過去において長くがん死亡数の中で一位を占めてきた。国民病ともいえる本疾患に対して、数多くの研究や国家的対策がなされ、早期発見を目的とした集団検診の確立・普及、消化管X線二重造影や内視鏡検査による早期診断学の確立、詳細なリンパ節転移の研究に基づいたリンパ節郭清などの外科手術手技の確立などが1980年代頃までにはほぼ完成し、治療成績は大きく進歩してきた。疫学記述統計からは、胃癌の死亡率は1960年代をピークに男女とも大幅に減少している（p. 8, 第1章-1参照）。一方で、罹患率の減少は緩徐であり、相対的に治療による治癒症例が増加していることがうかがわれる。このような胃癌での早期発見・早期治療の成功はわが国でのがん治療のモデルとなり、他のがん種での診断や手術手技に大きな影響を与えてきた。さらに、早期診断や良好な外科手術成績など、胃癌の臨床ではわが国が世界をリードしてきたといっても過言ではない。

1990年代以降も、胃癌の診断・治療面での進歩は続いている。*H.pylori*感染が胃癌の原因の1つと判定され、今後*H.pylori*除菌による予防の可能性が示唆される。内視鏡分野では、新しい診断機器としてnarrow band imaging (NBI)が開発され、拡大内視鏡との併用で腫瘍病変の視認性が飛躍的に向上している。内視鏡的粘膜切除術(EMR)は、リンパ節転移を伴わない早期癌での標準治療となっている。特に近年の内視鏡的粘膜下層剥離術(ESD)の確立とその普及は目覚ましい。病変の一括切除が可能であることから利点が多く、内視鏡切除の中心としてその適応拡大がさらに臨床試験として進行中であるが、すでに早期癌の約半数は内視鏡治療によって治癒が得られる時代となってきている。画像診断機器の発達により、より正確かつ精緻なステージ診断も可能となり、手術や薬物療法を実施するうえで多大な情報が得られるようになった。

外科手術手技の標準化も進み、各種臨床試験結果から、D2郭清を伴う胃切除術がわが国の標準術式として確立し、世界への普及が図られている。さらに侵襲の少ない腹腔鏡下手術も広がりを見せつつあり、現在開腹手術との比較試験が進行中である。胃癌薬物療法においても、S-1、イリノテカン、タキサンなどの有効薬剤が開発され、切除不能進行例での大幅な生存延長と術後補助化学療法での治癒率向上が臨床試験結果から証明され、日常診療での必須な治療法となり、さらなる治療成績の向上を目指して術前治療としての展開も試みられている。分子標的治療薬の開発が進み、human epidermal growth factor receptor 2 (HER2)陽性胃癌に対するトラスツズマブの有効性が証明されており、今後HER2陽性胃癌という新しい病型の確立が行われていくことが予想される。実臨床の場で欠かせない緩和ケアに関する知識や技術の普及も飛躍的に進んでいる。

## 2 胃癌治療の臨床現場の変化

このような膨大な進歩は、臨床の現場を大きく変えつつある。それぞれの診断、治療法が高度になり、個々の患者さんの病態に応じてさまざまな治療法の組み合わせによる集学的治療が必須の時代へと変化している。消化器内科医が関与する領域が飛躍的に増えていると同時に、薬物療法を専門とする腫瘍内科医や緩和ケア専門医師も誕生し、それぞれが徐々に増加しつつある。専門施設では、1人の医師がすべてを行う時代から、複数の専門医師がチームとして胃癌診療を行う時代へと確実に変貌しつつある。

## 3 本特集を読まれる方へ

胃癌は一般施設でも多く遭遇する疾患であり、若手消化器内科医にとって実臨床の場でその対応に悩む場面も多い。施設によっては、上記のような専門医師に限られる場合もあるものと思われる。本特集はそのような消化器内科若手医師や研修中の先生方を対象に、実臨床の場での胃癌診療の実践的な内容を中心に記述されている。それぞれの専門領域の先生方に、実際の診療上の工夫やコツなどを自施設の研修中の先生方に教える視点で記載をお願いし、是非読んでおいていただきたい重要な文献に関してもコメントを加えていただいた。治療後の胃癌患者を診る機会のある開業医の先生や一般内科医の方にも役立つ内容となった。本特集がひとりでも多くの先生方の実臨床での一助となれば望外の喜びである。

### Profile 大津 敦 (Atsushi Ohtsu)

国立がん研究センター東病院 消化管腫瘍科 科長

1983年東北大学医学部卒。いわき市立総合磐城共立病院、国立がんセンター中央病院レジデントを経て'92年から国立がんセンター東病院消化管内科勤務。'97年米国MD Anderson Cancer Center留学。2002年国立がんセンター東病院内視鏡部長。その後外来部長、通院治療部長を経て'08年より臨床開発センター長。現在は、消化管がんの新薬臨床開発を中心に取り組んでいる。

